

『国際連盟』を出版した篠原初枝・早稲田大教授

第二次世界大戦を防げなかったため「失敗」といわれることが多い国際連盟の再評価を試みる『国際連盟―世界平和への夢と挫折』（中公新書）が出版された。初の普遍的な国際組織として生まれた連盟の26年とは何だったのか。当初、4番任理事国の一角を占めた日本はどう行動したのか。著者の篠原初枝・早稲田大教授（国際関係史）に聞いた。

【宇俊光、写真】

篠原教授は『戦争の法から平和の法へ』（東京大学出版会、2003年）で、第一次大戦から第二次大戦までの「戦間期」に戦争違法化に尽力した国際法学者の姿を描いた。国際連盟の研究を始めたのは博士論文とそれを基にしたこの旧著から。今回の本の執筆依頼を受けたのは、日本の国際連合常任理事国入りが目指された05年のことだった。

「国際連盟は、二度と第一次大戦のような戦争を起こさないという所期の目的を達成できなかった。しかし、難民や文化などの国際協力の制度的枠組みは進んだ。ひとりで評価するのは難しいと思います」

「失敗」のレッテルから、日本でも欧米でも、戦後に連盟について書かれた本は少ないという。

国際連盟は1920年1月、42カ国を原加盟国に設立され、本部をスイスのジ

戦争防止への苦闘と成果を検証 日本の外交、国際連合への遺産も探る



しのはら・はつえ 1959年、東京生まれ。米シカゴ大で博士号。明治学院大助教授を経て、2004年から現職。

ユネーブに置いた。本書は連盟史料館の一次資料などを用い、上り坂の20年代、日本の行動、苦闘の30年代、46年の終焉までを追う。

第一次大戦末に14カ条の講和原則を発表した米大統領ウィルソン、連盟構想の表現に大きな影響を与えた英連邦南アフリカの政治家スマッツ、連盟初代事務総長のイギリス人ドラモンド……。△重視したのは、当時の空気を再現したいという点△と、あとがきにあるように、ゆかりの人々に光を当て、連盟を血の通った組織として描いていく。

読みどころは、日本のかかわりだ。米国の不参加もあり、連盟はヨーロッパ中心だった。そうしたなかで日本の存在は、アジアを含む世界的組織であることと、その成果は数多い。

「当時、日本にとって重要なのは中国問題だった。この点では国際連盟が具体的に利益をもたらしたとは言えないと思います」

「国際連盟の遺産とは何か。戦後日本に、連盟の経験はどう生かされたのか。現代的意味をさらに考えてみたいと思っています」

いがたい。だが、日本人は連盟によく貢献した。20年代までは、日本の地位を高め外交大国に押し上げたとも言えるのではないかと、キョリー夫人の信頼を得て、知的協力に力を注いだ事務次長の新渡戸稲造や、理事会議長としてドイツとポーランドの国境画定という難題にあたった石井菊次郎らの活躍が生き生きと記される。それだけに満州事変をめぐる、33年に日本が連盟を脱退した衝撃は大きかった。リットン調査団に日本側が豪勢な食事を用意して、ぎりぎりの接点を探った挿話が印象深い。

紛争・戦争の30年代を迎え、常任理事国による侵略が起きたときに国際連盟は有効な手を打てなかった。他方、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）など社会・人道面で連盟を起源とする成果は数多い。